第一節　安宅切の位置

一

安宅切の名称は、安宅家という旧蔵者に因むものかともされているが、確証はなく、その由来は不明である。『新撰古筆名葉集』の「權大納言行成卿」の項には、「安宅切 朗詠 巻物 金銀下画哥二行圭」とあるが、古来、書写者は、藤原行成、藤原公任、源俊頼とさまざまに伝称されている。

安宅切の書写者について、小松茂美氏は、「藤原伊房の筆と推定される〈藍紙本万葉集〉［一巻、京都国立博物館蔵ほか］や〈十五番歌合〉［一巻、前田育徳会蔵ほか］などの書風に一脈通じる雰囲気があり」、定信が「この〈安宅切〉の筆者ではなかったか」[1]とされた。また、春名好重氏も、「〈安宅切〉の書風は藤原伊房の書風を継承したものであり、伊房の書跡と認められている〈藍紙本万葉集〉の書風に類している」とされ、飯島春敬氏も、「伊房の書と判定される男性的な書風をやや穏やかにしたもので、これはその漢字の特徴からも、伊房系に属する名手によって書写されたものと思われる。藍紙万葉、大色紙、西本願寺三十六人集重之集などがあるが、本書もその系列に入る書風である」とされた。藤原伊房と藤原定信の書が類似しているということは通説となっているが、[2]安宅切の書に関する先学のご論は、藤原伊房や藤原定信の書風に類しているという点において一致している。[3]

安宅切の料紙は、雲紙・染紙に素紙を交え、「全面に金・銀の砂子・切箔・野毛を撒き」[4]、「上・中・下段に、交互に金泥および銀泥で横に細長く土坡を、それに沿って草叢を描き、中に飛び交う小鳥を金泥で加え」[5]た美術的なもので、「書写年代は、十二世紀の初頭」[6]と推定されている。

書・料紙については如上のごとく見解が示されているものの本文については堀部正二氏が「未だ系統を知り得ない」[7]とされ、不明であることから安宅切の形態・本文について検討を行った。以下、その考察結果について述べる。

二

はじめに、安宅切の現存状況（調査し得た資料）について述べる。

小松茂美氏は『古筆学大成』[8]において、断簡五葉・零本一巻を収められた。その断簡を(1)〜(5)、零本を(6)とし、詩歌番号順に纏めると次の通りである。

(1)東京国立博物館所蔵[9]
613・614・615・616・618・619・620・622・623・624・625・626

(2)高松宮家旧蔵
631・632・633・634・635・636・637・638・639

(3)陽明文庫所蔵
650・651・652・652の次[10]

(4)宮内庁所蔵
655の後部・656・657・658・659の前部

(5)白鶴美術館所蔵
703・704・705・706

(6)宮内庁所蔵
653・654・655の前部・659の後部・660〜663・674〜677・679〜702・707〜796・796の次・798・799〜804

右掲(6)には、「655の前部」と「659の後部」の間、及び、702と707の間に、切り継ぎ、あるいは紙継ぎの跡と思しき線が看て取れる。655・659は、一首中、切断されており、便宜上、「655の前部」・「659の後部」としたが、この「655の前部」と「659の後部」の間に位置する五首（655の後部・656・657・658・659の前部）は右掲(4)の断簡に当る。また、702と707の間の四首（703・704・705・

706）は右掲(5)の断簡に当る。従って(4)・(5)の断簡は(6)から切り取られたと考えられる。また、663と674の間にも切断の跡と思しき線がみられるので、664から673までの部分も切り取られたものと思われる。

なお、右掲(1)の断簡の、616と618の間、及び620と622の間には、紙継ぎなどの跡は見当たらないので、617・621は、元来、安宅切には存しなかったとみてよいのではなかろうか。

以上を整理すると、安宅切では『和漢朗詠集』巻下の後半部の、和歌三二、漢詩一三四、合わせて一六六首が現存しているといえる。

平安時代の書写とされる諸伝本を通じて知られる詩歌句を集成すると、八一五首となり、『和漢朗詠集』全体からすると安宅切には二〇％弱が存していることとなる。

三

形態的な面から考察を行う。

安宅切の現存する範囲内において、平安時代の書写とされる諸伝本のうち、ある詩歌句がいずれかの伝本に無い場合を全て挙げる。詩歌番号を挙げ、その詩歌句が無い場合は「無」とし、ある場合は「有」として括弧内には伝本の略号を示す。

①615無（雲）
　有（安・関・粘・伊・久・唐1・巻・下・山・戊・葦）

②617無（安・巻）
　有（雲・関・粘・法・伊・久・唐1・下・山・戊・葦）

③618無（雲）
　有（安・関・粘・法・伊・久・巻・山・戊・葦）

④621無（安・巻）
有（雲・関・粘・伊・久・山・戊・葦）
⑤636無（雲）
有（安・関・粘・近・伊・久・巻・益・山・戊・葦）
⑥652の次無（雲・関・粘・近・伊・久・益・山・戊・葦）
有（安・巻・定大）
⑦657無（雲）
有（安・関・粘・近・伊・久・巻・下・山・定大・戊・葦）
⑧663無（雲）
有（安・関・雲切・粘・近・伊・久・唐1・巻・太・山・戊・葦）
⑨677無（雲）
有（安・関・粘・近・伊・久・巻・山・戊・葦）
⑩678無（安・雲・関・粘・近・伊・久・巻・山・戊・葦）
有（久）[11]
⑪684無（雲）
有（安・関・粘・近・伊・久・巻・太・多・戊・葦）
⑫699無（近）
有（安・雲・関・粘・伊・久・巻・太・山・戊・葦）
⑬701無（関）

有（安・雲・粘・近・伊・久・巻・太・山・戊・葦）

⑭703無（雲）

有（安・関・粘・近・伊・久・巻・太・山・戊・葦）

⑮712無（雲・関）

有（安・粘・近・伊・久・巻・山・戊・葦）

⑯714無（雲・関）

有（安・粘・近・伊・久・巻・山・戊・葦）

⑰729無（雲・関）

有（安・粘・近・伊・久・巻・太・山・戊・葦）

⑱735の次無（安・雲・関・粘・近・伊・久・巻・太・山・多・戊・葦）

有（雲切）

⑲736の次無（安・雲・関・粘・近・伊・久・巻・太・多・戊・葦）

有（山）

⑳738無（葦）

有（安・雲・関・粘・近・伊・久・巻・太・山・戊）

㉑739無（葦）

有（安・雲・関・粘・近・伊・久・巻・太・山・戊）

㉒740無（葦）

有（安・雲・関・雲切・粘・近・伊・久・巻・太・山・戊）

㉓ 741 無（葦）
有（安・雲・関・粘・近・伊・久・巻・太・山・多・戊）

㉔ 742 無（葦）
有（安・雲・関・粘・近・伊・久・巻・太・山・多・戊）

㉕ 743 無（葦）
有（安・雲・関・粘・近・伊・久・巻・太・山・多・戊）

㉖ 744 無（葦）
有（安・雲・関・粘・近・伊・久・巻・太・山・多・戊）

㉗ 745 無（葦）
有（安・雲・関・粘・近・法・伊・久・巻・太・山・戊）

㉘ 756 無（雲）
有（安・関・粘・近・伊・久・巻・太・山・戊・葦）

㉙ 757 無（巻）
有（安・雲・関・粘・近・法・伊・久・太・山・戊・葦）

㉚ 760 無（雲）
有（安・関・粘・近・伊・久・巻・太・山・多・戊・葦）

㉛ 784 無（雲・関）
有（安・粘・近・伊・久・巻・太・益・山・戊・葦）

㉜ 785 無（近）

有（安・雲・関・粘・伊・久・巻・太・益・山・戊・葦）

㉝796の次無（粘）

有（安・雲・関・近・法・伊・久・巻・太・益・山・戊・葦）

㉞797無（安・雲・関・巻・太・戊・葦）

有（粘・近・伊・久・益・山）

㉟803の次無（安・雲・関・粘・近・法・伊・久・巻・太・益・多・戊・葦）

有（山）

㊱804無（近）

有（安・雲・関・粘・法・伊・久・巻・太・益・山・多・戊・葦）

右の三六項目において、安宅切と諸伝本（略号で示す）との対照箇所数を上段に、安宅切との一致する箇所数を下段に各々示し一覧表にすると次の表のごとくである。

本表は、対照箇所数が比較的多いものについて述べる。

【詩歌句の有無調査結果】

略号	雲	関	雲切	粘	近	法	伊	久	唐1
対照箇所数	36	36	3	36	31	7	36	36	2
一致する箇所数	19	28	2	31	26	6	32	32	1

略号	巻	太	益	下	山	多	定大	戊	葦
対照箇所数	36	25	7	3	35	10	1	36	36
一致する箇所数	35	25	6	2	29	10	1	33	25

安宅切と巻子本とは三六項目のうち三五項目が一致していることが知られる。しかも、そのうちの二項目（②・④）は安宅切と巻子本のみに共通する事象である。また、逆に、両本が、定信筆大字切とともに、「後人の加筆」[12]とされている一首（⑥）「伊可天難遠人二裳登者むあやしきはお毛盤ぬな可能えさ類ましきは」を共有しているという点は注目すべきである。これに対して、安宅切と巻子本唯一の相違箇所（㉙）は、巻子本のみにみられない詩句であり、巻子本での欠落である可能性が高いと考えられる。

次に、排列についても前項「詩歌句の有無」で行ったことと同様に安宅切に現存する範囲内において、他の伝本の安宅切との異同を全て挙げる。

①615・616・618・619・620・622（安・巻‖）
616・617・619・620・621・622（雲）
615・616・617・618・619・620・621・622（関・粘・伊・戊・葦）
616・617・618（法）
615・618・619・620・621・622・616・617（久）
615・616・617・618と619後部の合成・620・621・622・619前部（山）
615・616・617（唐1・下）
619・620（多）

②631・632・633・634・635・636（安・関・粘・近・伊・巻‖・山・戊・葦）
631・632・633・634・635（雲）

634・635（法）

631・635・636・632・633・634（久）

③655・656（安・雲・関・粘・近・伊・巻‖下・山・多・戊・葦）

633・634・635・636（益）

656・655（久）

④686・687（安・雲・関・粘・近・伊・巻‖太・多・戊・葦）

687・686（久）

⑤701・702（安・粘・近・伊・久・巻‖太・山・戊・葦）

702・701（雲）

702（関）

⑥726・727・728（安・雲・関・粘・近・伊・巻‖山・戊・葦）

728・726・727（久）

⑦729・730（安・粘・近・伊・久・巻‖太・戊・葦）

730（雲・関）

730・729（山）

⑧742・743・744（安・雲・関・粘・近・伊・久・巻‖太・戊）

742・744・743（山）

743・742・744（多）

⑨746・747（安・雲・関・粘・近・伊・巻‖太・山・俊和・戊・葦）

747・746（久）
⑩754・755・756（安・関・粘・近・伊・巻Ⅱ・太・山・戊・葦）
754・755（雲）
755・756・754（久）

以上の排列の揺れから、久松切・山城切・雲紙本等の独自性が知られるが、それはさておき、安宅切は巻子本と全て一致していることが確認される。従って、形態的には、前述した「詩歌句の有無」における考察結果と合わせみると、安宅切は巻子本と近い関係にあるとみることができる。

四

個々の本文を考察した結果について述べる。

和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全本文に亘って行った。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

安宅切の本文を諸伝本と対照してみると、安宅切独自の本文数は、和歌：一四か所、漢詩：四三か所である。そしてその部分においては次に示すごとく杜撰な本文が目立っている。

＊和歌
①脱字と思しき箇所…四か所（693・718・732・789）
②衍字と思しき箇所…四か所（652・693・705・764）

＊漢詩

①脱字と思しき箇所…一八か所（613・614・615・619・620・625・674・685・691・706・719・720・728・736・744・746・754・757）
②衍字と思しき箇所…九か所（622・656・660・709・753・758・782・783・785）
③転倒と思しき箇所…二か所（742・744）
④字形の類似（偏傍冠脚などの文字成分が共通している場合も含む）に因る誤認と思しき誤写…一一か所（618・658・698・714・731・738・752・779・782・793・799）

以上のごとく、安宅切には、誤字、脱字、衍字と目される本文が甚だしく多いのである。

また、安宅切を除く諸伝本の独自本文については、たとえば、

◆620都府楼―看瓦色観音寺只聴鐘聲

における当該（傍線）箇所は、諸伝本（雲・関・粘・伊・久・安・山・多・戊・葦）では「纔」とあり、それに対して巻子本では「纔」を脱しているが、この事例のごとく諸伝本が同文であるのに対して、ある一本のみが異文である場合を検討してみると、ある一本の本文は、誤字、脱字と目されるケースが圧倒的に多いものである。

安宅切と諸伝本との本文関係の概要について調査するに当たり、安宅切の現存する本文が『和漢朗詠集』全体の約二〇％のみで、諸伝本との対照し得る箇所数が僅かであることから、安宅切、及び諸伝本の誤字、脱字と目される本文をそのまま対照し、実質的異同と同レベルで扱う方法では本質を見誤るおそれがあると考えた。漢詩は一文字、和歌は一句を単位として異同調査を行い、安宅切と諸伝本との本文の異同関係を数値で示したものが次の【本文異同調査結果】であるが、表の作成に当ってはそれらのことを考慮して以下の方針によることとした。

安宅切については安宅切のみにみられる本文は対象外とした。

安宅切を除く諸伝本については、そのうちの一本が他の諸伝本に対して異文を有し、かつ、その他の諸伝本の全てが安宅切と同文である場合については対象外とした。

【本文異同調査結果】

	略号	雲	関	粘	近	伊	法	久	巻	太	益	山	多	戊	葦
和歌	対照箇所数	20	21	21	18	20	11	21	22	16	10	20	4	21	21
和歌	同文箇所数	8	7	16	12	17	8	16	17	12	9	7	3	15	19
漢詩	対照箇所数	72	75	76	71	76	23	76	75	3	20	72	19	76	69
漢詩	同文箇所数	26	29	38	37	40	10	44	67	3	13	35	8	45	45

同表によると、和歌においては、安宅切に現存する和歌は三二首であり、諸伝本との対照箇所数は僅かではあるが、葦手本とは、対照箇所数二一か所のうち一九か所が一致しているということが知られ、その異同箇所は次の二か所のみであった。安宅切の本文を載せ、異文箇所に傍線を付し、以下、諸伝本間における異同を示し、括弧内にはその本文を有する伝本の略号を挙げる。

①639としことの春の別をあはれともひとにおくるゝ人そしるらむ（安）

〈異〉ひとそしりける（雲・関・粘・近・伊・久・巻・山・戊・葦）

〈同〉人そしるらむ（益）

②733いつくにかみをはよせましよのなかにおいをいとはぬひとのなけれは（安）

〈異〉ひとしなけれは（粘・近・伊・久・山・戊・葦）

〈同〉ひとのなけれは（雲・関・巻）

右掲①は、西本願寺本『元真集』[13]・『前十五番歌合』[14]・『深窓秘抄』[15]・『金玉集』・『三十六人撰』に「としことのはるのわかれをあはれともひとにおくるるひとそしりける」とあるように、歌意からしても「人そしりける」とあるべきところである。また、②も、『撰集抄』[16]第八「為頼歎老苦」では、粘葉本等の「ひとしなけれは」であり、安宅切の本文は転化したものと思われる。

葦手本に次いで同文箇所の割合の多い伊予切との異文箇所は三か所で、それは右掲①②、及び、右掲①の第一句目で、安宅切が「としことの」であるのに対して、伊予切では、粘葉本・近衛本とともに助詞一字の異文をもち、「としことに」とある。

以上、安宅切と近い本文をもつ葦手本・伊予切との異文箇所には、一方の誤写によって異なっているところがあると思われ、安宅切との関係は、本質的にはさらに近いものであったとみてよいのではなかろうか。

次に、漢詩においては、前掲の本文異同調査表によると、安宅切と巻子本との本文関係は、対照し得る箇所七五か所のうち六七か所もの同文箇所が認められた。さらに、安宅切と巻子本とは二本間においてのみみられる本文をも有している。その全例を挙げると次の通りである。安宅切の本文を載せ、当該箇所に傍線を付し、安宅切・巻子本の文字を挙げ、以下、諸伝本間における異同を示し、括弧内にはその本文を有する伝本の略号を挙げる。項目ごとに＊印を付し、他の文献も載せる。

①650年長毎勞推甲子夜寒初無守庚申（安）

〈異〉共（雲・関・粘・近・伊・久・山・益・多・戊・葦）

〈同〉無（巻）

＊『全唐詩』許渾八「贈王山人」。当該箇所、「共」。

②658仁流秋津洲之外恵茂筑波山之陰渕變作瀬之音寂〻閑口沙長為巌之頌洋〻満耳（安）

〈異〉聲（雲・関・粘・近・法・伊・久・山・戊・葦）

〈同〉音（巻）

＊『古今和歌集』真名序。当該箇所、「聲」[17]。

③660布政之庭風流未必敵[1]—崑閬兼之此地也好文之[2]—徳化未必光到于黄炎兼之者我君也（安）

〈異〉(1)於（雲・関・粘・近・法・伊・久・山・多・戊・葦）

〈同〉ナシ（巻）

〈異〉(2)世（雲・関・粘・近・法・伊・久・多・戊・葦）

代（山）

〈同〉　ナシ（巻）

＊『本朝文粋』[18]巻十「暮春侍宴冷泉院池亭同賦花光水上浮応製」。当該箇所、(1)ナシ、(2)「代」。

④677西京席門便是陳丞相之舊宅南山芝澗寧非袁司徒之幽栖（安）

〈異〉乃是（関・粘・近・伊・久・葦）

　　豈非（山）

　　非乃（戊）

〈同〉便是（巻）

＊『本朝文粋』巻五「為清慎公辞右大臣第三表」。当該箇所、「豈非」。

⑤727少於楽天三年猶已衰[(1)]齢也遊于勝地一日非是老[(2)]幸哉（安）

〈異〉(1)之（雲・関・粘・近・伊・久・山・戊・葦）

〈同〉　ナシ（巻）

〈異〉(2)之（雲・関・粘・近・伊・久・山・戊・葦）

〈同〉　ナシ（巻）

＊『本朝文粋』巻九「暮春藤亜相山庄尚歯会詩」。当該箇所、(1)「之」、(2)「之」。

⑥759齢亜顔駟過三代而猶沈恨同伯鸞歌五意而将去（安）

〈異〉噫（雲・関・粘・近・伊・久・太・山・多・戊・葦）

〈同〉意（巻）

＊『本朝文粋』巻十「初冬同賦紅葉高窓雨」。当該箇所、「噫」。

⑦770銀魚腰底辞春浪綾鶴衣間帯暁風（安）

〈異〉舞（雲・関・雲切・近・伊・久・太・益・山・戊・葦）
　　曳（粘）
〈同〉帯（巻）

⑧799秦皇驚歎燕丹之吉日烏頭漢帝傷嗟蘇武来時鶴髪（安）
〈異〉之（雲・関・粘・近・法・伊・久・太・益・山・戊・葦）
〈同〉ナシ（巻）

⑨802蘆洲月色随潮満葱嶺雲膚与雲連（安）
〈異〉雪（雲・関・粘・近・法・伊・久・太・益・山・多・戊・葦）
〈同〉雲（巻）

右掲①は、「王山人と庚申を守って夜を明かした」の意であるから、安宅切・巻子本の「無」は誤写である。諸伝本のごとく「共」とあるべきところに「無」とあるのは、次に例示するごとく、書体が行草体などに崩れた際、「無」と「共」の字形が類似することに因るのではなかろうか。[19][20]

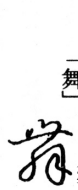
「無」　 　「共」　

また、前掲③の当該箇所(2)では、村上天皇の御代をさすので、安宅切・巻子本の「好文之」では意味が通らない。⑧についても、「燕丹之去日烏頭」（安宅切、「去」を「吉」とする）と「蘇武之来時鶴髪」とは対応しており、安宅切・巻子本の「蘇武来時鶴髪」では「之」が脱落している。また、⑦については、「銀魚」は「束帯の腰に帯びる」ものであるので、安宅切・巻子本の「帯」はその連想による誤写か、あるいは、「帯」と「舞」とは、次に載せるごとく、書体が崩れると上部の字形が類

似するため、誤って書したことによるのか等と推測する。

「帯」

「舞」



⑨についても、「白雲が山々の白雪と相連なっている」という意であるので、当該箇所は諸伝本のごとく「雪」とあるべきで、安宅切・巻子本の「雲」は誤写による本文である。

以上のごとく、安宅切と巻子本の二本にのみみられる、いわゆる共通異文例の中には、両本の関係の近さを特徴的に示す箇所もあるが、巻子本を諸伝本の本文と対照してみると、巻子本一本のみが脱していると思われるのは四七か所である。また、前掲①のごとき字形の類似に因る誤認かと思われる誤写、及び、前掲⑨のごとき偏傍冠脚などの文字成分が共通した別字となっているのは五九か所である。また、たとえば、743「往事」とあるべきところに「往年」とあるなど、上下の文字からの連想により別の語に転化したように取れる独特な本文もみられ[22]、巻子本では、不用意な書写による誤謬と思しき漢詩本文が諸伝本中最も多いといえる。そこには巻子本も、安宅切と同様、能筆家により、美麗な料紙[23]を用い、美的観点に配慮して書写された作品で、安宅切・巻子本の制作上の意図には、本文内容の正確さよりむしろその点に重きがおかれていたという事情があったものとみられる。このように、安宅切は、錯誤とみられる本文を巻子本と共有しており、この巻子本の独自色に注目すると、安宅切と巻子本との本文関係は、前掲の本文異同調査表における数値上よりも実質的にはさらに近くなることが予想される。また、独自本文を多くもつ安宅切が誤謬本文の多い巻子本と近く、しかも特異な本文を共有していることは、両本が極めて近い関係にあって、その成り立ちに深い関係があることを物語っているといえよう。

一方、巻子本に次いで近い関係にあると考えられる葦手本との同文例については、724「眠」とあるべきところに、安宅切・葦手本では誤写と思しき「眼」があり、625「西」とあるべきところに、安宅切・巻子本・葦手本の三本では「西」が脱落して

いることなどが挙げられる。

また、安宅切とのみ同文箇所を有する場合については、前掲の益田本（639「人そしるらむ」［諸伝本「人そしりける」］）、久松切（619「棹」［諸伝本「舷」など］・652「いほやさきたつ」［諸伝本「いをやさきたつ」］）、太田切（794「臥」［諸伝本「朽」］）などがある。益田本の書写年代は、「十一世紀後半」[24]、また、久松切は「一二世紀はじめ」[25]、太田切は「一一世紀半ばすぎから後半にかけて」[26]の頃の書写とされており、安宅切とは同時代、あるいは安宅切よりもやや遡るものである。これらの伝本と安宅切との関係について考える上で次のごとき異同が挙げられる。安宅切の本文を載せ、その部分に傍線を付し、以下、諸伝本間における異同を示し、括弧内にはその本文を有する伝本の略号を挙げる。

①757范蠡収責棹扁舟而逃名謝安辞功鞭孤雲而養志（安）

〈異〉臥（雲・関）

伏（粘・近・法・伊）

〈同〉鞭（久・山・太・戊・葦）

②780行宮見月傷心色夜雨聞猿腸断聲（安）

〈異〉断腸（雲・関・粘・近・法・伊・久・巻・戊・葦）

〈同〉腸断（太・益・山）

右掲①は、十一世紀中葉の書写本では「臥」・「伏」とあるのに対して、安宅切などでは「鞭」で、『本朝文粋』巻四「為貞信公辞摂政第三表　後江相公」でも「鞭」とある。「鞭」については、堀部正二氏により、「平安朝後期より漸次変形転訛を来し始めた朗詠集本文の過渡的相貌を示す」[27]とされた本文である。また、②の安宅切の本文についても、『白氏文集』巻十二「長恨歌傳　前進士陳鴻撰」と合致している。そこは堀部氏が山城切の本文について論じられた際、「特異のものとして本文批評上重要視すべき」[28]とされた箇所である。十一世紀中葉以降、十二世紀頃には校訂が行われていた可能性が考えられる。

五

以上、諸伝本間における安宅切の位置をめぐって考察を行った結果、安宅切は巻子本と極めて近い関係にあることが明らかとなり、また、葦手本とも和歌においては同文箇所を多く有しており、漢詩においても安宅切と葦手本の二本間においてのみみられる本文が認められた。

安宅切と比較的書写年代の近い、久松切・太田切・益田本との関係も注目される。

世尊寺家の伊房・定信風の筆とされている巻子本と伊行筆の葦手本の本文とは近い関係にあり、また、葦手本は唐紙切2とも近く、戊辰切とも類同的であるといえる。[29] 先学の研究によると、唐紙切2が伊房の手になるという説もあり、また、戊辰切は巻上が定信筆、巻下が伊行筆ともされている。

安宅切は、現存する分量が少なく、詳らかにし得ないところも多々あるが、如上のごとき内容からみて、やはり、世尊寺家及びその周辺に継承された伝本の流れを汲む一本であると考えられる。

なお、定信筆大字切も現存する断簡が、模写[30]一葉を含め、七葉に限られ、その本文系統の推定は極めて難しい。しかし、世尊寺家の定信の真筆とされており、定信筆大字切も安宅切・巻子本とともに後人の加筆とされている「いかてなほ[31]」歌を共有している点など、この一系に属すと考えてよいと思われるもののあることを感じる。

注

(1) 小松茂美氏解説『日本名跡叢刊』83［昭和59年　講談社］79頁

(2) 古谷稔氏「藤原伊房」（東京国立博物館編『ミュージアム』一六九号［昭和40年　美術出版社］）。

(3) 森田子龍氏編『墨美』第一六六号［昭和42年　墨美社］41頁・飯島春敬氏著『飯島春敬全集』第七巻［昭和61年　書藝文化新社］216頁

(4) 森田子龍氏編『墨美』第一六六号［昭和42年　墨美社］41頁

(5) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一四巻［平成2年　講談社］338頁

(6) 前掲（注5）に同。339頁

(7) 堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』［昭和56年　大学堂書店］37頁

(8) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一四巻［平成2年　講談社］339頁

(9) ［(1)東京国立博物館所蔵］の断簡は、藤原定信の真筆とされる、詩書切（出典不明）と合わせて「一巻の巻物に仕立て」られており〈前掲（注5）に同。336・337頁〉、冷泉為恭（一八一三―一八六四）の旧蔵。堀江知彦氏「為恭の執念―行成かな消息と詩書切・安宅切にからむ―」（東京国立博物館編『ミュージアム』一一九号［昭和36年　美術出版社］）に詳しい。

(10) 記述中、「の次」とは、『新編国歌大観』には無く、無番号。当該番号の詩歌句の次（ここでは652の次）に位置することを意味する。本表記により当該詩歌句の位置を示す。以下、同。

(11) 久松切、別筆。久松切「書写完成の直後、これを掌中した別人が、みずから加えたもの」〈『古筆学大成』第一三巻 428頁〉とされる。

(12) 山田孝雄氏校訂『岩波文庫676倭漢朗詠集』［昭和14年　岩波書店］13～15頁

(13) 『私家集大成』による。

(14) 『前十五番歌合』・『金玉集』・『三十六人撰』は久松潜一氏校『公任歌論集』第四九冊［昭和2年　古典文庫］による。

(15) 『深窓秘抄』は古谷稔氏解説『日本名筆選2　深窓秘抄／伝宗尊親王筆』［平成5年　二玄社］による。

(16) 安田孝子氏ほか編著『撰集抄―校本篇―』［昭和54年　笠間書院］による。

(17) 伝藤原佐理筆　筋切・通切、［敷］（『古筆学大成』第二巻）。

(18) 柿村重松氏註『本朝文粋註釋』上・下［昭和43年　冨山房］による。

(19) 児玉幸多氏編『くずし字解読辞典 普及版』［平成5年　東京堂］による。

(20) 779にも「共」とあるべきところに安宅切一本では「無」とある。

(21) 前掲（注19）に同。
(22) 285・410・422・588・670・743など。
(23) 前掲（注5）に同。347頁
(24) 前掲（注1）に同。362頁
(25) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一三巻［平成2年　講談社］427頁
(26) 前掲（注5）に同。358頁
(27) 前掲（注7）に同。323頁
(28) 前掲（注7）に同。331頁
(29) 拙稿「葦手本の位置」（本書〈第三章第三節〉）・「戊辰切の位置」（本書〈第三章第五節〉）において述べる。
(30) 冷泉為恭（一八二三―一八六四）の手になる。前掲（注5）に同。397頁
(31) 安宅切・巻子本では、652の次に位置する（『新編国歌大観』には無く、無番号）。

［謝辞］
安宅切の複製本一帖（前掲「(6)宮内庁御物」の零本一巻に当る部分）の閲覧に際しまして、宮内庁書陵部の方々にお世話になりました。記して御礼申し上げます。